

## 「魂・意識」の次元における人間の本质構造

下 程 勇 吉

### 目 次

- 一、意識の本质構造の問題
- 二、意識の現れる場としての身体の力動的恒常性の地平
- 三、身体的生命の平衡の破れと意識の現成
- 四、意識の形而上学的背景

#### 一、意識の本质構造の問題

『モラロジー研究』三三二号所載の「身体性の人間学的構造」において、「身体・生命」の次元における人間の構造の本质を究明して来たわれわれは、今や「身体」に「魂」が宿り、「生命」に「意識」があらわれる、第二段階の人間構造の場に導かれるのである。この段階において、人間は「生命」をもつ「身体」そのものに、「意識」する「魂」を宿す存在として、天地の間を直立歩行する主体と成るのである。前稿において、直立人の構造の問題の究明に取り組んだわれわれは、今や「魂」をもつ意識人の構造の問題を取り上げる段階にさしかかったのであ

る。

意識の問題が、今日まで、また今日といえども、哲学乃至人間学の根本問題の一つであることは、争われないであろうが、われわれが今此処で問題とする「意識」は、実証心理学が取り上げる感覚・知覚等の要素の意識でもなければ、もとよりカントの先験観念論の意識でもなく、またフツセルの現象学的観念論の純粹意識でもなく、むしろ食物圈即行動圏というべき場で成立する生活関係のな直接意識である。すなわち先験的統覚の法庭において、認識の王国の市民権がはじめて与えられる感性的意識でもなく、ノエマ・ノエシス併行論的な現象学的純粹意識でもなく、身体的生命の行く手に立ちふさがる「生活の問題」に挑み、その解決の道を見出す日常的地平の意識の構造である。かかる生活直結の意識が取り上げられないままであったところに、従来のいわゆる観念論的立場一般の弱点があったのである。

その点に関して、唯物論的立場・精神分析的立場・生命哲学的立場・プラグマティズム・行動主義的立場等から鋭い批判が起ったのも、故あることといわれよう。これらの立場は、いずれも何等かの意味で生活関係的意識の地平そのものが現成し来る身体的基底を認めんとする点では、共通である。もともと意識が生起する身体的生活基盤をまともに認めないところに、観念論的立場の致命的弱点があるのである。意識・知性・意志・社会等々の人間の全生活を支える身体的基礎は、決定的に重大な人間学的中心問題なのである。

かかる立場に立つとき、われわれは外的生活環境との密接な関係をもつ身体そのものの相互作用的力動的平衡の場に幾重にも注目せざるを得ぬのである。かかる生命の自律神経的生理学的地平こそは、意識と欲望との基盤をなすものであって、それは海中にある氷山の部分にたとえられる。意識の場は、かかる意識下の生命の全体基盤に比すれば、氷山の海上に浮ぶ部分に比せられるのである。

もともと直接的全体生命の場がいわゆる植物神経的系統そのものよって根源的に制約せられる以上、意識の身体的基底は、幾重にも重大視せらるべき問題であって、まさに人間学的研究はここから出発しなくてはならないのである。まさしくこの点にこそ、自己内意識の次元のみに主として注目する内省心理学的立場や現象学的観念論が批判を免れぬ所以があるのである。その故に、曾つて判断論を展開するに当り、著者は意識の地盤をなす直接体験的実在にかかわるものとしての非人称判断から出発したのであった（拙著「現象学の方法とその哲学」三五四頁以下参照）。

しかしながら、意識の発生基盤の究明を重大視することを主張する立場に立つと言っても、それは何も神話的形而上学の大旆のもとに馳せ参じ、無意識の思弁哲学に耽溺し、方法論的認識論的に無軌道性の乱脈に陶酔する狂態に與するものでは断じてないのである。二十世紀に入る前から、つとに新カント派の批判主義や現象学派の厳密学志向主義の洗礼を受けた学徒としては、安易に神話耽溺主義にはしり、テレビタレントやジャーナリストに伍して、厳密学的科学性を地に委するなど、思いも及ばず、われわれは批判主義的客観性を尊重し、意識の本質構造そのものを身体的生命独自のホメオスタシスの構造に即して究明するであらう。

〔注〕 この点では、メグルト・ボスの現在分析的方法の方が、神話中心の思弁的独断的心理療法の方法よりも、はるか  
に人間学的真理の核心に迫るものをもっている（ボス「性的倒錯」第八章「結語」参照）。

## 二、意識の現れる場としての身体の力動的恒常性の地平

外部環境に関して、直立歩行体制という人間独自の運動様式をもつ人間は、内部環境に関しては、ホメオスタシスという高度の力動的平衡性乃至恒常性の場を恵まれている。従来、先天的に前成的因子によって決定せられ

ると考えられた、遺伝的素質乃至遺伝子担体としての染色体の在り方さえも、内部諸機能の相互関係の力動性の句配によって決定せられると解明せられるのである。

もともと男自体・女自体という如き区別を絶対視することが、問題的である如く、正常者と異常者との区別も、絶対的ではない。ワインンガー (Weininger, O.) をまたずとも、男性のうちにも、多分に女性的契機が含まれ、女性のうちにも幾多の男性的な要素が宿っているのである。半陽半陰の存在が器質的機能に見出されるごとく、何人も何等かの程度で、異常的であり変態的であると、解剖学的にもいわれる所以である。すなわち男性・女性、正常・異常等々と、アリストテレスの二分法的対立が、非連続的対立として形相的先天的に成立しているのではなく、現実的には、あらゆる契機の相互干渉作用によるはたらか合いの力動的傾斜の場が、一応の形相的状况を現しているのである。かかる連続的交互作用的な場における対立的契機を類型化し概念化するとき、その極限に正常・異常、男性・女性等々の形相的規定が立てられるにすぎない。現実的には、全面的に男性的にして、更に女性的なるものを含まぬが如き、純粹形相的存在はないのである。また遺伝学的にも、純粹なる形相性によって規定された不変不動の家系的遺伝形質などというものは、今日しかく容易に語られなくなったのも、当然といわれよう。

六本指の人の先祖や子孫が、常に必ず六本指をもっているとはいわれない。統計の示すところによれば、これらの変種のもは、むしろ単発的散発的な例外であると云われているのである。また同じ類型に属するもの(例えば、アレルギー体質)にも、極めて著しい個別差が認められる。一見、先天的家系的に一定不変の如く見える、いわゆる遺伝形質も、実は何らかの意味でその心身をめぐる内外環境の句配値が比較的に一定しているところに成立するにすぎないのであって、それは決して先天的決定論的な形相ではないのである。いわゆる「種」とは、かかる意味で、内外環境の場の句配値が大数的に一応語られるものといわれよう。個体的な存在は従来のアリストテレス的な意味における種の先天的な前成的因子によって規定せられないで、レヴィンが説くがごとく、ガリレオ的な意味における種の力動的相互作用の場の従属変数として成立つのであるといわれる所以である(この点に関しては、Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, 1910, 参照)。

かくの如く、すでに従来先天的に決定せられると考えられた遺伝の領域すらも、内外環境における諸機能の相互作用の限定が一定の句配値をもつものとして、力動的平衡の場において成立するのであって、一定不変の先天的形相をもつものではないとせば、生命の場を根源的に特色付ける力動的恒常性は、人間存在におけるあらゆる在り方とその活動を根本的に規定するものとして、人間学的に決定的な重大性をもつものといわねばならない。

ここに我々は近代理論生物学においてその重大性をますます認識せられつつある動的平衡の概念、ことに理論生物学者ヘルタランフイ (Bertalanffy, 1901-72) の力動的平衡論、さらには、キャンオンにおいて鮮かにとり出された内部環境の場の力動的恒常性の概念の意味を重ねて本章においても検討せざるを得ぬのである。

モナコフは一九二八年に身体的諸機能を「調和的平衡」にもたらす力動的生命力を *Synechesis* と名付け実証的に研究したのであるが、ワルター・キャンオンとなると、次のごとく説くのである。「人間の身体の内には、内的条件ならびに外的条件を攪乱することに対抗して、その安定性を維持する讃嘆すべき仕組みがあり、また野獣ならびに顕微鏡的病原菌に対抗して、その本来の性能を確保するすばらしい設備がそなわっており、さらに日常生活の必要度を越えた、構造的な強さと機能的な対応力とのきわめてたっぷりしたゆとり *Margin* をたたえている」(The *Wisdom of the Body*, revised edition, p. 242-3)。実にホメオスタシスの力動的恒常性の場は、身体をもつ人間存在の無上の宝庫である。

以下、漸を追って論究するごとく、意識・技術・労働・経済・政治・宗教等々のあらゆる人間活動は、何らかの意味で、内外の生活の力動的平衡性の確立にかかり、それをめざさぬものはないのである。日々・時々・

刻々、動揺に動揺を重ね、不安に不安を募らせるのみの人間の生活乃至生命が、すべて平衡をめざすところ、一にも平衡、二にも平衡、三にも平衡であるとまでいわれることも、故あることである。実に、人間存在そのものは、一応皮膚によって、外部環境と境せられる、身体の内部環境の精妙な自律神経の拮抗支配に基づく、ホメオスタシスの機能の力動的恒常性の小宇宙の平衡の場を享受し得るまでに、進化したのである。その間、DNAともRNAとも蛋白質ともいわれるものは、かかる生命のいわゆる創造的進化の途上に現成した形相的構造にほかならない。

### 三、身体的生命の平衡の破れと意識の現成

異質的否定的契機なくして、全面的に静止した場とか、終始等質様な運動が行われる場などには、主題化的志向的意識は、現成せぬのである。いわゆる心広く体胖かな、身体的健康人の内部環境の平衡の場そのものごときは、一般にはほとんど意識に上らぬのである。さらに直立歩行の際、大脳中枢の媒介により全身一般の諸器官は重力乃至地面に対して「極めて精巧なりズムの適応をなす機構」(モナコウ)という性格をもってはたらくのであるが、かかる平衡そのものの場のごときは、ほとんど意識に登らぬのである。そこには、不平衡を語る余地なきほどに、全面的平衡がその場を支配しているから、その平衡を喪失する特定の瞬間以外には、平衡に関する意識は、現れ得ぬのである。まさに太平の風、枝を鳴さざる場には、意識は現れぬのである。内外の生活体験の場の平衡を破る対象にして、はじめて意識の志向的客体となるのである。ことに内部環境のホメオスタシスの場の力動的平衡が破れるとなると、それを体感的に感知する「魂」に意識が逸早く現れ、その体液の平衡を恢復せんとする欲望と行動とを動機付けるのである。この点をキャンオンは、次のごとく記述している。「体液の状態の広範囲にわたる変化に対する、注目すべき主要安定策は、感覺的自動指針または監視器がはたらくことであって、

その機能たるや、体液の平衡がまさに破れはじめ、丁度そのとき平衡をとりもどすはたらきを発動せしめるのである。もし此の際、水が必要であるならば、渇きを覚える体のしくみが、血液に如何なる異常事態が起つてしまふ前に、われわれにそれを警告するから、われわれはそれに応えて水を飲むのである云々」(op. cit., P. 288)。まさに体内の体液的平衡の破れを感知するところ、直下端的にそれを充さんとする欲望の先端に光を放つものが、いわゆる意識なのである。

身体の内環境のホメオスタシスの平衡の破れに動機付けられて、「魂」の場に直下端的に現れるいわゆる意識は、生命の平衡の両組織の更新作用を媒介する中間項なのである。かかる事態からして、キャンオンは意識の発生基盤そのものを成す身体的環境の恒常性すなわちホメオスタシスの重大性を「生体の第一義的条件」 a primary condition of the organism (op. cit., p. 295) として位置付けるのである。

既述のごとく、生命なるものは、もともと海洋という、力動的恒常性の広大な場に発生したのであるが、とくに人間は、その内部環境のホメオスタシスの機能の進化により、その力動的恒常性の驚異的發展展開を遂げたのである。

実に一九三二年に公開された、画期的著作「人体の智慧」において、キャンオンは内部環境のホメオスタシスの性格、すなわち力動的恒常性 dynamical constancy を説くにあたり、敢えて次に掲げる仏国の生理学者、チャールス・リシェー Charles Richet の言葉を引用しているのである。曰く「外見的には、矛盾のように思われるが、生物は刺戟せられ、外的刺戟に即して自分自身の在り方を変え、よくその反応を刺戟に適合させ得るときにのみ、その安定性を維持し得るのである。ある意味では、生物は変り得るが故に、安定しているのである、すなわち軽度の不安定性こそは、生物体の真実の安定性にとって、必要な条件である」(op. cit., p. 27)。まさしく生物体、別して人間の身体は、変り得る力動性の故に、安定し得る恒常性を享け得る場として、いわゆる力動的恒常性の

場そのものをまさにその内部環境としているのである。

かくのごとき構造をもつ、内部環境の力動的恒常性は、身体性の本質を成すと共に、意識性そのものの基盤を成すのである。水分の欠乏と云う身体的内部環境の力動的平衡の破れは、同時に渇きの意識を動機付けるのである。過度の労働により身体の平衡が脅かされるとき、疲労感乃至疲労意識が現われるのである。

またさらにモノコウがあらゆる生物の本能的形成力としての *synthesis* の自己平衡性を敢えて *conscience biologique* と称して、これを人間固有の *noohormétères* または本来の意識としての *conscience morale* の基底としていることも、また身体的生命の力動的平衡性が如何に深く意識につながるかを思わせるのである。身体の *homeostasis* または *synthesis* は自動的無意識的でありながら、直ちに「意識」と「欲望」の地平圏に深く通じているのである。身体環境の力動的恒常性の場は、「意識」の身体的基底そのものにはかならない。

キャノンが「人体の智慧」よりも十二年前に公けにした「苦痛・飢餓・恐怖・憤怒における身体的変化」 *Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear and Rage, 1920.* においてつぶさに明かにしたことく、身体的環境の力動的平衡が破れるとき、人間の魂は、それを意識する飢餓・恐怖・憤怒の体験に促されて、身体的行動に出て、その失われた平衡を再建するのである。

まさにかかる身体環境の力動的恒常性によって、人間の魂は内外の生活の場の平衡の破れを鋭敏に感知して意識する関心 *Sorge* の主体となり得るのである。すなわち意識なるものは、本質構造的に内外の生命体験の平衡の破れ目に現れ、その破れた生命体験流の平衡を再組織的に樹立する媒介的中间項として機能するのである。生命体験の力動的恒常性を絶えず再組織的に更新し維持する生活の中心としての「魂」は、根源的に自己保存的努力 *conatus* であるとともに、生命の場の再組織に中間項としての媒介機能を果す意識は、生活関与的な智慧 *scientia humana*。

すなわち力動的恒常性の場としての身体環境においては、その力動的契機がたえず外部の刺戟に反応して波立ち一上一下する間に、その恒常的契機は原始印象の多様をよく形態化して、そこに生れるイメージをノエマ（志向客体）として意識するのである。従って、いわゆる意識なるものは、身体環境の力動的恒常性にもとづく構成的機能が、たえず創造的に生産する新しきイメージの万華鏡である。

かくて内外環境のホメオスタシスを核心とする人間生命の力動的恒常性の場の平衡の破れに現れる意識は、人間生活の場の絶えざる再組織を媒介する関心的中間項として明滅出没するのである。

もともといわゆる植物的神経の拮抗支配によって、自律的に力動的恒常性を保っている人間の内外環境のホメオスタシスの場は、その平衡を破る因子が衝撃的に現れるや否や、それを意識する魂は間髪を入れず、直下に機能的に反応し、その生命の場の平衡を新しく創造的に再組織する行動に出るのである。すなわち、直接的ホメオスタシスの体験の力動的恒常性の場の再組織的な更新契機が、まさにノエシ的な意味の意識なのである。

かかる構造は、いわば点的に現成する意識のみならず、その連続体としての、いわゆる意識流にも、類比的に見られるのである。すなわち瞬間的意識のみならず、連続的意識流もまた力動的恒常性の構造において生成するのである。

すなわち絶えざる流をなしている意識の場は、刻々力動的に変化しながら、構造的に恒常的形態をなし、その変化はレヴィンのいわゆる「体系内の構造的変化」 *structural change within the system* なのである。意識流の場も、力動的に刻々変化しながら、恒常的な形態をなしているのである。

変化と統一、不平衡と平衡、力動性と恒常性、これらの両契機の徹底的相即性こそ、意識の本質構造をなすのである。変化や不平衡のみであれば、その構造は不安定であり、神経症的で崩壊に瀕している。さりとて恒常的契機のみ硬直性でも意識は成立しない。むしろ生命の場の平衡が破れるところ、新しき平衡への志向と胎動を

孕む機において、意識は成り立つというべきである。また何一つ波立つことなく、驚き・恐れ・不安等の平衡喪失契機なきものは、木石であつて、正常意識ではない。まさに平衡を破る動性をふくんでよくその常を失わぬ力動的恒常性こそ、意識を成立せしめる構造的基底なのである。

力動的恒常性の喪失は、意識の條件の喪失である。力動的なるも、恒常的契機に欠けるもの、またその逆のもの、何れも正常な意識ではない。すなわち力動的に恒常的という相互補足的緊張性に欠けて、極度に流動的なものも、極度に固定的なるものも、ともに正常ならぬ心的状態である。レヴィンが「意識の場の組織が、あまりにも流動性に欠けることと同様に、あまりにも流動的であることも、また精神薄弱的な行動の型に導く」と語る所以である (Lewin, K. *Dynamic Theory of Personality*, p. 227)。

かかる構造聯関よりして、あまりにも興奮しやすいか、あまりにも無感動であるか、またあまりにも反抗的であるか、あまりにもおとなしいか、その間に「連続的に種々の度合をもつた緊張に欠け」、一方的に偏した「機能的硬直性」functional rigidity に止まる二者選一的行動 the either-or behavior に偏することこそは、精神薄弱者の特色をなすと言われるに至るのである (op. cit., p. 214, 215)。ここでは、その場の状況に力動的に対処して自づから定まる、しなやかさ乃至弾力性の代りに、一度「定刻に水をやれ」と命令されると、雨の日にも、水をまくような紋切型の行動が見られるのである (田村一二報告)。また一方的に固定した方向の学習、例えば暦日や漢字の機械的な記憶には、極めてすぐれていても、現実的な生活能力には致命的に欠ける idiot savant (天才白痴) の在り方も、ここで想起せられるであろう。まさに力動的恒常性の構造を欠如する意識は、正常意識ではなく、異常意識である。

実に人間の「生命」の次元のみならず、「意識」の次元においても、力動的恒常性がすべてを支えているのである。その力動的契機が外的刺激に呼応し反応し、その場の状況の意識を動機付けるとき、それとともに、また恒常的契機の方は、意識された平衡攪乱の場を再組織して、新しき恒常性の場を創造的に成立せしめるのである。かくして、(一) 力動的契機による平衡攪乱の意識の出現、(二) 恒常的契機による平衡再建の操作の遂行と云う、出入・内外・動静一貫の体験の発展において、「魂・意識」の次元は、構造的に成立するのである。

#### 四、意識の形而上学的背景

「生きているものは、原理的に意識をもっている」という立場に立っているベルグソンは、「最も微々たる下等動物といえども、それが自由に運動する程度に応じて、意識的である」(Bergson, *L'évolution créatrice*, p. 121) と説いているのである。地上に固着し、太陽と大地とからエネルギーを摂取し貯蔵する植物が、意識的運動に欠けるのに対し、植物・動物をとらえて食物とする人間には、意識的運動が必要欠くべからざるものとなると云われるのである (op. cit., p. 118, 126)。

ことに複雑高度の内部環境をもつ人間の場合は、その内外の環境の場における生活面の平衡が極めて破れやすいとともに、その平衡擾乱に敏感なるところに、人間は「意識」をもち、その生活の場を再組織せんとする欲望を抱き、さらに進んで労働・技術・経済・教育・政治等、百般の合目的的活動を通じて、絶えず新しい平衡の場を創造しつづけるのである。人間にして身体的に力動的平衡の場を欠き、平衡破綻も意識せず、平衡回復も欲望することがないままであれば、人間の個人的社会的な一切の技術的文化的合目的的活動は起らぬであろう。

その限り、人間がその生活のあらゆる方面における律動的全機性の場を通じて、繊細且つ敏感に、内外生活環境の場における平衡の破れを感知し意識するところに、他の動物に抜きん出て、その生活の場を創造的に更新する方向を孕む、「魂・意識」の次元における人間の根本動向があるのである。生活の場の平衡の破れを力動的に鋭敏に感知して欲望を抱き行動を起し生活の場を再組織して、日々これ新なる力動的恒常性の場を開くところに、

人間のあらゆる文化的活動が動機付けられるのである。

もともと主として生物学的見地よりして規定せられた力動的平衡なるものは、自律神経の支配によりていわば無意識的に成立つ、内部諸機能の相互作用的なホメオスタシスの場にはかならない。植物神経系に属する無意識的動的平衡の場は、根源的に動物や人間の生命の本質的基底を成している。この点から見る限り、動物と人間とを分つものはないであろう。

かくして植物神経の拮抗支配に依存する、体内のホメオスタシスの力動的恒常性の場の平衡が、刺激され擾乱せられるとき、それを直下端的に感知する意識が、内部環境の場の平衡更新的媒介機能として現れるのである。人間学的階層の場において、「自然・物質」の次元と「精神・自覚」の次元との中間において、「身体・生命」の次元と「魂・意識」の次元とに生きる人間存在は、一方で、「身体・生命」の次元のホメオスタシスの構造よりして、全身の力動的恒常性の体胖かな平衡感を享けるとともに、他方、「身体・生命」の場のゆとりある平衡が破れる非常事態においては、人は違和感を覚え、「魂・意識」の場は波立ち、人間は意識的に不安の主体となるのである。

その点の身体的生理学的変化については、キャノンが明かに指摘した如く、非常時においては、瞳孔は拡大し呼吸は切迫し、血行血圧は高まり、アドレナリンは副腎より分泌せられ、体内環境の平衡が自動反射的にはかられるが、かかる反射的自律神経支配の調整作用は、同時に恐怖・憤怒等の情緒として、主体的意識面に波紋を描くのである。

人体液体乃至内的環境くらい不安定なる組成と機能との裡に現成する力動的恒常性を示すものはない。それが複雑であり精妙であるだけ、その平衡は破れやすく外的刺激に対して敏感である。ここに自律神経的支配によつて反射的自然的に「調和的平衡性」を保つ体液的内的環境が、同時にその柔軟なる感性に即して自己平衡の破

れを「意識」する基底ともなる所以があるのである。

かくしてたえず内部環境のホメオスタシスの平衡を維持することを身体的生命の根本規定としている人間存在は、その平衡が破れるや否や、それを端的に意識し、その平衡の破綻を救済して新しき平衡をもたらず物質としての、飲食物を摂取する行動に出るのである。その限り、人間存在は——フォイエルバッハ流の人間学が端的に示すごとく——「その食するところのもの」である (Der Mensch ist, was er ißt.)。

すなわち人間存在は、「我、思惟す、故に我あり」 cogito ergo sum. の根底に「我、欲す故に我あり」 volo, ergo sum. があり、さらに一層端的には、「我、食す、故に我あり」 edo, ergo sum. があるのである。

その限り、進化論的にも、「棲みわけ」の原理の前に、「食いわけ」の原理が先行するのである。すなわち生物が乙の場所より甲の場所を選び「棲みわけ」るのは、「食いわけ」の見地からして、乙の場所よりも甲の場所がより有利であるからである。ベルグソンも「生活するとは、適切な反作用で物に応ずるために、物から有用な印象のみを受取ることである」(邦訳「笑い」一四〇頁)。かくして、意識の本質は、身体的平衡の新旧両組織の中間的媒介項であるところにあるのである。

かくして、かかる構造をもつホメオスタシスの内部環境を宿す一切の生命は、原理的には、意識性を宿すといわれる。従つて意識を人間存在のみに限り、意識の身体的生理的基盤を無視する観念論的立場に終始することは、知性中心主義の人間学の致命的弱点ともいわれるであろう。古くはアリストテレスが、近くはベルグソンが語る如く、「生きたものは原理的に意識をもつ」といふべきであろう。この点で、意識の問題は人間心理学的知見のみならず、ある場合には、むしろそれ以上に、動物心理学的洞察や生理学的知見からも、多くの示唆を得ることができるといふべきであるといわねばならない。

意識に対して、その生理学的基盤のもつ意味を思わせるものは、覚醒と睡眠との関係である。常識的には、覚

醒が正常状態であつて、睡眠は例外状態と考えられるであろうが、生理学者や動物学者はむしろその逆をとらうとしてゐる。このことは、ある種の生理学者によつて、人間生命はその九十五パーセントまで植物的生命の次元に属するとまで主張せられてゐることを想起せしめるものである。人間生命における以上に、植物的生命が重大な部分を占めてゐる、他の動物においては、覚醒よりも、睡眠の方がむしろ根本的であるし、人間の場合においても、植物神経的次元の場の平衡が破れたときに、はじめて覚醒意識があらわれるといふべきであらう。

もともとひろく感覚刺激とは、心身両面の生活の場の平衡を破るものといふ意味をもつてゐる以上、かかる刺激によつて現成する意識とさらには欲望とは、一般にその生活の場の平衡の擾乱を以つて、その成立の機会因とするといわれよう。ここでも、存在の否定的契機が重大な役割を演ずると云われるのである。かかる否定的契機が決定的な媒介機能を發揮するのは、「精神・自覚」の階層においてである。

一切が静止してゐるところでは、すべてのものが一樣に動いてゐるところと同様に、意識は現成しないのであらう。動物心理学的にも、ユクスキユルは、ドーレ鳥は静止してゐる蝗<sup>いせ</sup>は絶対に認めることができないで、動いてゐる蝗のみを知覚する云々と、報告してゐる。一切が透明な静止状態にあるところとか、何もかも同一速度で運動してゐるときとかなどの場合には、意識は現象しないのである。平衡を乱す不調和的なものとか、連続を破る非連続的なものとか、否定的なものが全然ないところには、神の意識はあり得ても、人間の意識は成立せぬであらう。

意識の発生基盤をなす直接体験の流を「現象」と呼ぶパラギーは、次の如く説いてゐる、「我々の意識活動は、現象の流から浮き出てくるのであるが、それは現象の間断的（非連続的）性格によるものである。我々の思惟作用にして全然間断的性格をもたずして、現象とともに流れ行くのみであるならば、意識は現象の流と一体化し、そもそも意識というものは全然起らぬであらう」（Palagyi, Grundprobleme der Naturphilosophie, S. 32）。

かくて異質・不平衡・不均等が全然なくて、一切の現象が一樣に静止するか、また一樣に運動するところでは、事物の知覚や意識は現成せぬのである。或る物体が他の物体と光に対する反射・吸収・屈折等の率を全然等しくするならば、その物体は認知せられぬであらう。空中にある一物体が見えるのは、その物体が空中の塵埃等と光に対する上記の條件を異にするが故である。

かかる構造聯関の意識が、内外環境の力動的恒常性の場を再組織し更新して、よく人間生活を環境に適應せしめる点に関して、ウイリアム・ジェームズが意識を目して、人間が外界に適應する進化論的補助機能とするのは、妥当である（James, W., Psychology, briefer course, p. 3-4）。

かかる進化論的意味をもつ内部環境にその生命のすべてを負う限りの生きとし生ける者は、そのホメオスタシスの平衡を維持するために、意識的に水を求め食物を探して自由に運動するのである。ベルグソンが「最も劣等な生物体といへども、それが自由運動をなす程度に應じて、それは意識的である」（Bergson, L'évolution créatrice, p. 121）と、明確に説く所以である。

この点に関して、宇宙的生命のいわゆる創造的進化を説くベルグソンは、また次のごとく述べてゐる。植物的生命と動物的生命とは、ひとしく宇宙最大のエネルギー源泉の太陽からエネルギーを享受しながら、植物はそれぞれの生長とともにその種のエネルギーを製造して貯蔵するにとどまるのに対し、動物となると、それぞれ独自の形式の運動をして、摂取したエネルギーを消費し爆発させて、その種独特の創造的進化を遂げるのである（Bergson, op. cit., p. 125-6）

その際、特に特に注目すべきことは、地上に固着して養分をとり、成長する植物は、意識的運動の方向に発達し得なかつたのに対し（op. cit. p. 121）、動物は他の植物・動物を捕食するために、意識的運動の方向に進み、その結果、感受性に眼醒めた意識をもつ動物と無感受性にとどまる植物との対立を生じたのである。（op. cit., p.



上來縷々述べ来たごとく、内部環境のホメオスタシスの力動的平衡の明鏡止水的身体体験のいわば「無」Nichtsの冷暖自知の平衡の場に住している人間は、いわゆる外的刺激に動機付けられて、その凡情の意欲を煽りたてられ、「<sup>〔我欲我利〕</sup>意必」Ichtsの障碍によりて、透徹純一な心身一如的ホメオスタシスの「無」Nichtsの光 Lichtを反射的に現像して意識にもたらずとところ、「無」Nichts ⇄ 「意必」Ichts ⇄ 「光」Lichtという明暗双々底の場が展開されるのである。すなわち、ヘーメ的に、「無」Nichtsの光りを遮る「意必」Ichtsによりて、「意識」の「光」Lichtが反射的に現れるのである。

人間はかかる構造の意識をもつのみならず、さらにその事態を客観化して、かかる意識をもっている事態そのものを自覚するに至るのである。このことは、タヴィド・カツツが「動物と人間」Animals and men (邦訳二六一―二頁)で明確に説き、動物にはかかる「自覚」はないと述べているところである。かくて、われわれは今や「精神・自覚」の次元における人間の本質構造の究明に向わねばならないのである。